
ある日僕は女の子を拾った

まさひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日僕は女の子を拾った

【Nコード】

N3784U

【作者名】

まさひろ

【あらすじ】

どこにでもいる普通の^{ふじやうせい}高校生 藤原^{ふじはら}悠貴

そんな普通の高校生がある日自分の家の前で倒れていた少女^{みよこのうい} 宮小路^{みやこうじ}沙希を救う

「ねえハル、私たちが出会ったのって『運命』だったのかな？」
「『運命』じゃなかったら何なんだ沙希？」

これはどこにでもいる普通の高校生がどこにでもいない少女を救う
お話

序章 家の前に倒れていた少女

僕の名前は藤原悠貴^{ふじわらはるき}

この春やつとの事で志望していた高校に入学する事ができた

今は春と夏の間の梅雨

そろそろ高校にも慣れてきてクラスにも馴染んでくる季節

そんな季節に君はもし、まったく見ず知らずの少女が暑い夏に自分の家の前で倒れていたらどうするだろうか？

これはそんな普通の高校生がとある少女を助けるようなお話です

「だあゝ暑い！なんでこの季節ははじめして暑いんだよ！」

「お前の方が熱いわ。しゃべるなバカ」

学校が終わった帰り道

その帰路と一緒に歩いているのは高校最初の友達（友達と呼んでいいのか分からないが）、高木翔吾^{たかぎしょうご}

同じクラスで隣の席だったため向こうから話しかけてきたのがきっかけだ

どっちも部活には入ろうとせず帰宅部のため一緒に帰っていたいつもは帰り道にある喫茶店でしょべっているかゲーセンで遊んでいた

翔吾が何やらケータイをいじっていた

返信したのかケータイを閉じてポケットに入れこっちを向いたちょうど通りの信号が青に変わった

「悪い悠貴、急に用事ができた。今日は帰るわ」

「そうか、じゃあ俺はマクド行つて帰るかな」

「おう、また月曜な」

マクドと翔吾の家は交差点を曲がるためここで分かれた
俺はまっすぐマクドの方に歩いていった
だが俺はこのときは知らなかった
進んだ道がこの後の運命を変えるものとは……

マクドでシェイク（今日の気分はストロベリー）を頼んだ
今は住宅街をうろつる散歩中
俺はシェイクを飲みながら街をぶらぶらするのが好きだった
外で飲む方が開放感があって好きだからだ
ズズー

「もうなくなったのか」

空になった容器を盛っていたら運良く近くにゴミ箱があった
それに向かって放り投げた
弧を描いてゴミ箱に入った

「何にも起きなきゃ良いけど……」

実は手で扱う球技がものすごく苦手だった
それが入るとなったら嫌な予感以外しなかった
案の定、曲がり角で走ってきた男の人とぶつかった
向こうの方が体格が良くこっちが尻餅をついた

「いってー」

「ちつ、気をつけとけよ！」

そのまま走り去ってしまった

「そっちがぶつかつたんじゃないか！」

もう行ってしまったため聞こえてはいないが言わなきゃすっきりしなかつた

夏だと言つのに真つ黒なスーツを着たいかにも堅気かたぎではなさそうな男だった

まだ少しイライラしながらも道路に座っているため立ち上がりそのまま道を曲がった

「礼儀知らずな大人が多くなつたな」

道なりに進んでいくと黒塗りのベンツが駐車してあつた

窓ガラスもスモークで隠されていた

だが、ドアは開いたままで誰も乗っていなかつた

念のためドアは閉めてその場を後にした

面倒ごとには巻き込まれたくないので

「今日一日、本当に面倒ごとが多かつたな」

家がようやく見えてきたころ今日の事を思い出した

家の前まで行くとそこに見慣れない少女が大きなバックと一緒に倒れていた

少女といつても自分と同じくらいの年齢だろう

少し考えて声をかけた

「おーい、大丈夫か？」

返事がない、ただの屍しなばねのようだ
じゃなくて、やばいんじゃないこの状況！
今度は体を揺らしてみた

「うーん……」

よかった、意識はあった
けどこのまま放っておいたらどうなるかは分からない
それに、自分の家の前だし

「仕方ない。連れて帰るか」

苦渋（？）の決断を下しその少女を家に連れて帰る事にした
少女をおんぶして荷物を持った
以外にも女の子は軽いと初めて実感した

第1話 女の子の願い

家の前で倒れていた女の子

俺の親切心で今は俺のベッドで寝かしている

ちなみに決して邪な思よこしまいはないぞ！本当だぞ！

冗談はともかく

この女の子がどういう経緯いきわづで俺の家の前で倒れていたのかは聞いておきたい

「つてもうこんな時間かよ」

2時間くらいあの女の子の事を考えていたらく7時だった

日が傾いて少し暗くなっていた

晩御飯の支度したくをするために台所に行った

俺の家は父親が1年に数回、母親が1カ月に1回の割合で帰ってくる
そのため実質1人暮らしみたいなものだ

「いつも通りで良いよな」

今日は上で寝ている女の子の分も作る

材料と気分的に親子丼にした

女の子は食べてくれるかどうか分からないが……

ちょうど晩御飯の仕度ができた時

トトン トトン

と、誰かが階段を下りる音がした

まあこの家に今は2人しかいないけど

リビングのドアが開いた

「あ、あのー」

彼女の第一声は遠慮^{えんりょ}がちだった

けどその声はともかわいらしかった

「何？」

「えーと……」

ちよつと言い方がきつかったかな

起きたら見ず知らずの男の家にいて不安だろな
それよりこっちは腹減ってるし

「とりあえず晩飯作ってるけど食べるか？」

「じゃ、じゃあいただきます……」

もぐもぐ

うーん……ちよつと出汁が薄かったかな
久しぶりにしては上出来だろ

それにしても彼女の食べ方は上品だった
どこかのお嬢様かよ！って言われてもうなずけるほど

「そのーお名前を伺っても良いですか？」

そろそろ俺もこの沈黙がきつかった
確かに未だに名前すら聞いてなかった
それより話題を振ってくれたのがありがたかった

「藤原悠貴^{ふじわらはるぎ}16歳。普通の高1だ」

「藤原悠貴さんですね。『ハル』って呼んでも良いかな?」

俺の名前からの上目遣い

危うく右手からはしが落ちるところだった
じゃなくて

「俺の呼び方くらい好きに呼べば良い。それであんたの名前は」

「沙希^{さき}……」

「上の名前は……って言いたくないから下の名前だけしか言わない
んだろ」

彼女……沙希自身が言いたくない事情があるのはわかった

話には出さなかったが沙希の手首にはテープで巻かれたような跡が
残っていた

だがそれは今は考えないで置く

「沙希自身これからどうするんだ?」

「それは……」

沙希は少しの間考えていた

俺の方は食後の一服のお茶を飲んだ
やっぱ冷たい麦茶だな

「私をこの家に住まわせてくれませんか?」

ぶーーーーー

きれいに麦茶が宙を舞った

この時はじめて口から吹き出す人の心情がわかった

第2話 女の子の一言

「私をこの家に住まわせてくれませんか？」

その一言はこの後の僕の人生を大きく変えた

彼女　沙希はどういう経緯いきどろで俺の家の前で倒れていたのかを教えてください

沙希はある事で父親とけんかをして家出をした
家出をしたその日に誘拐をされたらしい

どれも信じがたかったが彼女が嘘を言えるようには見えなかった

「まあ大体事情はわかりました。えっと……沙希で良いか？」

「あ、好きなように」

「じゃあ、沙希。俺は別に良いんだけど……」

彼女は何が駄目なのかわかっていなさそうで首をかしげいた
まあ何と云うかその姿見てたら可愛いな　じゃなくて！

「ほら、道德上俺らは男女同士だ。よく言っだろ『男女七三にして同席せず』って」

「それを言うなら『男女七歳にして同席せず』じゃないんですか？」

ちょっと間違えました

恥ずかし、まさかの彼女の指摘

ちょっと傷心中

気を取り直して

「沙希は平気なのか、見ず知らずの男の家に住むのが」

「少しは不安です、けどハルがもし悪い事をする人だったら寝ていた私を襲ってたんじゃないかな」

その言葉を聞いてあきれた

この子は人を少しも疑わないのかと

もし俺が彼女を住まわせなかったら本当の悪い人がこの子の言い寄って体をあんな事やこんな事をしてしまうのではないかそんな事を考えが現実になるのを回避しなくてはならないそう決断するのには時間はかからなかった

「沙希!!」

「あ、ひゃい!」

「悪い、いきなりでかい声出して」

「いえ、大丈夫です。あ、お茶どうぞ」

「どうも」

空になっていたコップに麦茶を入れてもらった

いきなり驚かされたのに他人に気が回るってこの子どれだけ気遣い上手なのよ

て言うかこっつて俺に家だよな

お茶を飲んで一息ついた

「じゃあ本題に入る。沙希、ここに住んでいいぞ」

「本当ですか!」

イスから立ち上がり俺の近くまでやってきた

いきなり俺の顔まで顔を近づけてきて心臓がバクバク鳴ってきた初めて沙希の顔を良く見るとそれはとても整っていた

きれいに通った鼻筋にくりくりとした大きな目

その表情は言葉にできないほどのうれしそうな表情だった

「えっと、そんなにうれしいの？」

「当り前じゃないですか！私を助けてくれた人がとってもかっこい

い！ごほんっ、とっても親切な人の家に住まわせてくれるなんてうれ

しいわけがないじゃないですか」

彼女の迫力に少し気圧されたが本人が喜んでいるのならこっちに

てはありがたい

それに長年の1人暮らしで寂しさもあったので俺の方もうれしかっ

たりもする

そんなわけで

「これからよろしくな沙希」

「私こそよろしくお願いしますハル」

こうして俺達の共同生活が始まった

第3話 女の子の寝る場所

まず最初の課題

女の子もとい沙希をどこで寝さすかだ

うちの構図は4LDKの一戸建てである

だが生憎と家には空き部屋がない

俺、父、母、弟で部屋が埋まっている

来客用の部屋でも作っとけよ！とは口が裂けても言えない（母に）
そんな事で今俺は必死に考えています

沙希は今はシャワー中です

決して覗きには行きません！！

それより、今の俺が考えたのは

1 俺のベッドを貸す（俺はリビングのソファで寝る）

2 俺の部屋で布団を敷いて俺が寝る（沙希にベッドを貸す）

3 一緒にベッ……ゴホッゴホッ

3つ目はボツとして

沙希には悪いがこの2つの中から選んでもらおう

「ハルー、何1人で喋ってるんですか？」

「わっ、びっくりした！」

いきなり後ろから声がかかって驚いた

知らないうちに沙希が風呂から上がっていたらしい
それより今まで声に出してたなんて……

「あのさ、お前の寝る場所なんだけど……この中から好きなの選んでくれ」

そう言っただけ俺は3つのフリップを出した

何か言いたい事はあるかもしれないが気にするな
作者がやりたいだけだから

とにかく彼女に選んでもらわなきゃいけない

「この3つから選ぶんですか？」

「ああ、この中から選んでくれ」

沙希は3つの中から……3つ？

「じゃ、じゃあこれにします」

そう言っただけ選んだのは、まさかの3つ目！

「ちよつと待つて……！何でこの中에서도それ……！」

「え！？ダメなんですか？」

あまりにもな驚きよう

断ると思っていなかったのか

「だからその他で選んでくれ」

「これがいいです……！」

「ダメ」

「いや！」

「拒否」

「けち」

・ ・ ・ ・

何気に不毛な争い

結局2つ目で収まった

その後沙希にこんな事を言われた

「ハルってへたれなんだね」

その日、俺は寝るまで目が光っていたのは誰も知らない

第4話 女の子の朝ご飯

朝、目が覚めた

今日は土曜日なので学校はないが起きた

実は早起きだったりする

布団から起きてベッドを見ると沙希の姿がなかった

「あれ、もう起きてんのか」

その時、部屋のドアが開けられた

「おはようハル。もう朝ご飯できてますよ」

「お、おう。わかった」

そこに立っていたのは沙希だった（逆に違ったら怖い）

今日の沙希の髪型は後ろでポニーにっていて、俺の使っていたエプロンに良く似合っていた

まさに動ける美人！

それにしても、朝からこんな美人の顔が拝めるなんて

と少しだらしない顔になっていたが頭を切り替えて起きた

「ご飯冷めちゃいますから早く降りてきてくださいね」

そう言つて階段を下りていった

俺はすばやく着替えてご飯を食べに降りた

ちなみに俺は他人の手料理を食べるのは久しぶりだった

テーブルの上に乗っていたのはごく一般的な朝ご飯だった
白ご飯、みそ汁、しゃけの切り身、卵焼き
いたって普通の和食なご飯だ

「いただきます」

俺はもくもくとご飯を食べた
簡潔に言おう

沙希の作ったご飯はともう良かった

「お口に合いましたか？」

小首をかしげて少し下からの視線がグッジョブ！
今日の服装はピンクのチュニックにショートパンツと動きやすい服
装だった

これまたグッジョブ！！
じゃなくて

「いや、うまかったぞ。て言うか俺よりうまいし」

「本当ですか！？実は私、今日はじめて1人で作ったんです」

「へー、それにしてもうまかった」

これはお世辞でもなんでもなく率直な感想
何年も1人暮らしをしている俺よりも料理が上手い
けどこの事実によつと嫉妬してしまう

「お母さんの手伝いでもしていたのか？」

「はい。ときどき……」

「ふーん、そうか」

ちよつと納得

けど、なんかくやしい

そんな小さい事で悩んでいた

その事に腹が立ったのか神様は俺に試練を与えてくれた

ピーンポーン

確かこう言つものって『テンプレ』って言わなかったっけ？

第6話 女の子の説明

ピーンポーン

その音は家の人を呼び出している事はわかる

だが俺には、どうしても地獄が待っているようにしか聞こえない

ピーンポーン

もう一度鳴った

「ハル、お客さんだよ？」

「あ、ああ」

内心はこんな状況では出たくなかった

何せ今は沙希が家に居ているからだ

仕方なく重い腰を上げてリビングのドアを開けた

「おつ邪魔しまーーす」

何の前触れもなく玄関のドアを開けられた

こんな非常識な事をするのはあいつしか居ない

「邪魔するなら帰れ……高木」

予想通り

もし高木だったら勝手に家に入る

そう思ってたリビングの入り口を自分の陰で隠していて正解だった

危うくりビングに居る沙希が見つかるころだっ しまった！沙

希の靴が出る！！

1人暮らしの男の家に女物の靴があると言つのはやばい事が起きる
もちろん俺に

俺は高木に早く出て行ってもらうために、

しかも靴がばれないようにいつもどおり追い返そうとし

「うん、どうした顔色悪い……………うん？」

え？見つかったああああああ！！！！

しかも一番見つかりたくないやつに

俺の人生オワタ＼（＾０＾）ノ

「もしかしてお前……………」

どうする気だ

ご近所さんに言うか？学校で言いふらすか？警察呼ぶか？

どの未知俺の人生はおわ…………

「女装趣味か？」

「断じて違う！！どう見たって足のサイズ合わねえだろ！」

こいつ、殴り倒してやろうか

今まで言われた中で最低の侮辱ぶじよくだ

「ハアーーーー。もういいよ、中入れ。説明ぐらいしてやる」
「？」

半ば諦めて高木を家に入れた
と言うか勝手に玄関まで入ってきてたけど

リビングまで高木を通した時目を見張っていた
まあ、1人暮らしの男の家に見知らぬ美少女がソファに座ってい
たら誰だって驚く
なんたつてまだ俺だって信じられないんだし

「こ、こんにちは……」
「あ、どうも……」

沙希は俺の友達であろうと思って高木に挨拶をしてくれた
それにしても、どっかのお嬢様みたいだな
一つ一つの動作が

そんな事に関心をしながら一応客の高木のためにお茶を出した
暑い夏にぴったりの麦茶を

「高木、こっちで話そうぜ。悪いが沙希も」
「お、おう」
「はい」

いつの間にかテーブルの上を沙希がかたずけていてくれた

それにしてもなんて気の効いた子なんでしょう

冗談はともかく今からはまじめな話をするために真剣な表情に変えた
高木もその場の空気が変わったのを察知したのかへてかさつきから
あまり喋ってはいなかったけど、ずっと口を閉じていた
そして俺は沙希の事について説明した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3784u/>

ある日僕は女の子を拾った

2011年10月9日01時37分発行